

2012年度 国 (問題) 語	
--------------------------------------	--

< H2406BY16 >

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および記述解答用紙を開かないこと。
- 2 試験中に問題冊子の印刷の読みにくい箇所、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 マーク解答用紙記入上の注意
 - (a) 印刷されている受験番号を確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (b) 解答用紙の解答欄は、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
 - (c) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないこと。
 - (d) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

(例)

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 4 記述解答用紙の所定の欄（二箇所）に、氏名および受験票に記載されている受験番号を正確に記入すること。受験番号は、右詰めで記入し、番号欄に余白が生じる場合でも、番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番
↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

※ 数字は読みやすいように、はっきり記入すること。

読みにくい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

- 5 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

路地で子供の隠れん坊遊びを見掛けなくなつてから既に時久しい。おおよそ十五年以上にもなるであろうか。時代が變つて遊戯の種類の体系が變化してしまつたことにもよるのであるが、そればかりではなく、路という路に自動車^{クルマ}が走り込んで **A** の疾駆^{ハヤカ}をほしいままにしていることが大きな原因の一つであると思われる。というよりむしろ、現代日本の時代の変¹ボウの方向や在り方を典型的に示しているのが、この自動車の無差別侵入という事態なのであつて、そういう變化の仕方²の結果、遊戯の体系も根本的に變り果て、路上の隠れん坊も眼界から消えてなくなつたのであろう。路地は家の内部と出入口を境にしてすぐ連続している親しい外の世界であり、人々が多目的に使う共同の空間である。それは役所的な意味においてではなくて私たちがそこで關係するという意味で公共空間である。その路地を「公道」なみに自動車^{クルマ}が疾駆^{ハヤカ}しているのが今日ただいまの我が社会的現状である。そしてそのお蔭^{かげ}をもつて路地から隠れん坊が消えた。

B、世界中に自動車を売りまくつて稼いでいる国なのだから、その国内が自動車^{クルマ}で満杯になつていてもそれは仕方³のないことであるのかもしれない。販売合戦なるものが、どんなに荒んだものを内に含まざるをえないかということとを、日常生活の傍らで多少ともカイ²間見ている者としては、世界中で繰り²拡げている日本の販売作戦が品位のある公正な競争行動だなどとは到底信じ難いから、すさまじい販売作戦で稼ぎまくっている国ならそれ相当の天罰^{てんばつ}を蒙^{こう}つても仕方³がないとも思ひはする。何かを獲^とることは別の何かを失うことだという費用の法則から言つても、「新重商主義」の荒稼ぎが払うべき犠牲はかなり大きいものになるのが当然であつて、「成長経済」によつて喪^{うしな}われたものは広く社会の各分野にわたつて相当に深刻なものはあるはずである。入つて来た金の額の増減だけに氣を取られないで、失われたものについての自覺をしつかりと持つていないと、金もうけだけは必要以上にしたけれどもその代り生き方についての価値や規準は無くなつてしまつて、何のための経済活動なのかその訳が分らなくなかなかねない。それが新重商主義の二リズムなのである。そして生き方についての精神的骨格が無くなつた社会状態は十分な意味ではもはや社会とは言い難い。一定の様式を持った生活の組織体ではないからである。それはむしろ社会の解体状態と言つた方がいい姿なのである。 **C**、そういう時にこそ得³てして社会の外側から「生活に目標を」与えてやろうという素振^{もて}りをもつて「国家のため」という紛^{まが}いの「価値」が横行し始める。そうなると社会の再³生はひどく難しくなる。国家とは機械的な装置なのだから、「国家のために生活する」ということは即ち生活が機械的装置の末端機関と化することを意味するだけである。生活組織と生活様式の獨立性はここでは崩れ去る他ない。

³ そのような道への分岐点³が、喪失の経験をおろそかにしてひたすら新重商主義の軌道を走り続けようとする態度の中に潜んでいるのだとすれば、私たちは如何にしても何が今日失われたものであるのかを根本的に確認しておかなければならないであろう。そして、かつて路上で何時でも任意に繰り²拡げられていた隠れん坊が、あれよあれよと言う間に消え失せてしまつたこともまた、今日の喪失経験の小さな一例なのである。 **D** 小さな一例だからといってその含意する社会的精神的射程範囲が小さいとは限らない。

隠れん坊の鬼が當つて、何十か数える間の眼かくしを終えた後、さて仲間どもを探³そうと臉^{また}をあけて振り返つた時、僅^{わずか}か数十秒前とは打つて變つて目の前に突然開けている漠たる空白の経験を恐らく誰もが忘れてはいまい。仲間たち全員が隠れて仕舞うことは遊戯の約束として百も承知のことであるのに、それでもなお、人つ子一人いない空白の拡がりの中に突然一人ぼっちの自分が放り出されたように一瞬は感ずる。大人たちがその辺を歩いていても、それは世界外の存在であつて路傍の石ころや木片と同じく社会の人ではない。眼に入るのはただ社会が無くなつたすっからかんの拡がりだけである。そして、眼をつむつていたいくらかの間の目暗がりから明るい世界への急転が一層その突然の空白感を強めていることであらう。

かくて隠れん坊とは、急激な孤独の訪れ、一種の砂漠経験・社会の突然變異と凝縮された急転的時間の衝擊、といった一連の深刻な経験を、はしやぎ廻³つている陽気な活動の底でばんやりとしかし確実に感じ取るように出来ている遊戯なのである。すなわち隠れん坊は、こうした一連の深刻な経験を抽象画のように單純化し、細部のごたごたした諸事情や諸感情をすつきりと切り落して、原始的な模型玩具の如き形にまで集約してそれ自身の中に埋め込んである遊戯なのであつた。そしてこの遊戯を繰り返すことを通して、遊戯者としての子供はそれと氣付かない形で次第に心の底に—

連の基本的経験に対する胎盤を形成していったことであろう。それは経験そのものでは決していないが、経験の小さな模型型であり、その玩具的模型をもてあそぶことを通して原物としての経験の持つある形質を身に受け入れたに違いない。

遊戯上のこの経験の核心の部分に影絵のように映っている「実物」は一体何か。すなわち隠れん坊の主題は何であるのか。G・ロダーリの指摘に従って端的に言うならば、この遊戯的経験の芯に写っているものは「迷い子の経験」なのであり、自分独りだけが隔離された **E** の経験なのであり、社会から追放された **F** の経験なのであり、たった一人ですまよわねばならない **G** の経験なのであり、人の住む社会の境を越えた所に拡がっている荒涼たる「森」や「海」を目当ても方角も分らぬままに何かのために行かねばならぬ旅の経験なのである。そして、そういう追放された彷徨の旅の世界が短い瞑目の後に突然訪れて来るところに、ある朝眠りから醒めると到来しているかもしれない日常的予想を遥かに超えた出来事の想像がその影を落している。それはほとんどカフカの世界にまで通ずるある可能的経験の暗示でさえある。

こうして「親指太郎」の世界と「隠れん坊」の世界とは全く同じ主題を持つて対応しているのであった。違いは、一方が言葉で話され耳で聞く（或は読む）のに対して、他方は仲間と一緒に身体を使って行為することにあり、従ってまた一方が主として家の内部を場とするのに対して他方は外の行動的世界を場とする点で異なり、一方が多くの場合老人である一人の話し手が必要とするのに対して他方は同輩の集団だけを必要とする点で異なっていたに過ぎなかった。両者は同じ主題が形態を全く異にして現われたものに他ならなかった。遊戯としての「隠れん坊」は、聞き覚えた「おとぎ話」の寸劇的翻案なのであり、身体的行為で集団的に再話した「おとぎ話」なのであり、遊戯の形で演じられた「おとぎ話」の実践版なのであった。

(Y) a ところで私たちは、もう既に、「孤独な森の旅」や「追放された彷徨」や、そして一定の「眠り」の後に起こる「異変」や「別世界の事」どもを、子供に向かって物語っている様々な「おとぎ話」や「昔話」の数々を想い起こしている筈である。b しかし他方、隠れん坊が模型化している一連の深刻な経験は、実際の事実世界における経験そのものから写し取ったものではない。c 先程来述べられたような「試煉」や「世界の経過」を経て、日常的予想を超えた在るべき結末（結婚）に到達することによって社会の中にあつたためて再生する物語りは、決して唯一つの表現形式に限られていないのだけれども、しかしその主題を子供の世界で展開するのは「おとぎ話」一つなのである。d それは「実物」でも「原物」でもなく、既に「おとぎ話」固有のある構図の中で物語られ昇華されている経験からの写しであった。

しかも隠れん坊とおとぎ話におけるその主題の消化の仕方は絶対的な軽さを持つている。主題は先に挙げた一連の基本的経験であつたがその深刻な経験の資料から来る重圧感にはここにはない。煩雑な細密描写を全て削ぎ取って明快簡潔に構図（構造というより構図）を描き出すおとぎ話固有の方法が、経験の重量を消去してそのエキスを血清のように抽出しているからであつたが、それと同時にそのおとぎ話を台本とする寸劇が言葉の使用を徹底的に取り払うことによって、玩具的に簡略な即物性を倍加させたからでもあつた。経験はここでは粘着的個性から解放されている。こうしておとぎ話が主題として語る経験は寸劇化されることによって一層重苦しさから解放されたエキスとなって、知らず識らずの間に血清として子供の心身の底深くに注ぎ込まれチクセキされていく。将来訪れるであろう経験に対する胎盤がこのようにして抗体反応を起こすことなく形成されるのであつた。

(Z) こうして見ると、家のすぐ外の路地で隠れん坊が行なわれていることが如何なる意味を持つかがいくらか分つて来るはずである。家の中で聞いたおとぎ話の主題は（或は部屋の中で読んだおとぎ話の主題は）、隠れん坊に翻案して遊ぶことによつて、「聞く」こと（或はそれに加えて「読む」こと）と「演ずる」こと、という次元を異にした二つの通路を通して心身の奥深くに受け入れられる。話を聞く際に受け取る抑揚やイン律の知覚、読む場合に自生的に起こる知的想像、無言演劇への翻案を通して滲み込む身体感官的な感得、それらが一体となつて統合的に主題が消化されるのである。

経験が、前頭葉だけのものではなく身体だけのものでもなく感情だけのものでもなくて、心身全体の行なう物事との交渉である限り、心身一体の胎盤が備わっていないところには経験の育つ余地はまずないと言ってよい。そういうところでは、経験となるべき場合においてさえ、そこから一回きりの衝撃体験⁷を受け取ることになるであらう。だとすれば、おとぎ話と隠れん坊、話と遊戯の統合的対応が失われている状態を放置することは取りも直さず経験の消滅⁸を

クシンすることに他ならないであろう。

(市村弘正編『藤田省三セレクション』による)

(注) 親指太郎：一寸法師のように、指先ほどの小さな子供が、さまざまな苦難を克服する昔話。

問一 傍線部1・2・6のカタカナにあてはまる漢字と同じ漢字をカタカナの部分に用いる語は、どれか。それぞれ次のイ～ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- | | | | |
|---------|-------|-------|-------|
| 1 イ 美ボウ | □ 備ボウ | ハ 興ボウ | ニ 工ボウ |
| 2 イ カギ穴 | □ カイ見 | ハ カイ消 | ニ カキ根 |
| 6 イ イン縁 | □ イン気 | ハ 脚イン | ニ 延イン |

問二 傍線部5・8のカタカナを、漢字(楷書)で解答欄に記せ。

問三 空欄 A に入る四字熟語として最も適当なものを次のイ～ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 変幻自在
□ 傍若無人
ハ 汗牛充棟
ニ 融通無碍

問四 空欄 B C D に入る最も適当な語の組み合わせを次のイ～ニから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- | | | |
|-----------|--------|--------|
| イ B もつとも | C それゆえ | D だから |
| □ B なかんずく | C しかるに | D つまり |
| ハ B たしかに | C そうして | D しかし |
| ニ B とはいえ | C やはり | D そもそも |

問五 傍線部3「そのような道への分岐点」の状態として適当でないものを次のイ～ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 「成長経済」によって社会の広い分野にわたって多くのものが喪われた状態。
□ 生き方についての価値や規準が無くなり、何のための経済活動なのかわからない状態。
ハ 生き方についての精神的骨格が無くなり、もはや社会とは言い難い状態。
ニ 生活が国家の末端機関と化し、生活組織と生活様式の独立性が崩れ去った状態。
ホ 一定の様式をもった生活の組織体ではなく、社会の解体した状態。

問六 空欄 E F G に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを次のイ～へから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- | | | |
|--------|------|------|
| イ E 孤独 | F 流刑 | G 彷徨 |
| □ E 流刑 | F 彷徨 | G 孤独 |
| ハ E 彷徨 | F 孤独 | G 流刑 |
| ニ E 彷徨 | F 流刑 | G 孤独 |
| ホ E 流刑 | F 孤独 | G 彷徨 |
| ヘ E 孤独 | F 彷徨 | G 流刑 |

問七 (Y) の段落の a、d の文は順序が正しくない。本来の順序を次のイへから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ a → d → b → c
ロ b → a → d → c
ハ c → d → a → b
ニ a → c → b → d
ホ b → d → a → c
ヘ c → b → a → d

問八 傍線部 4 「一連の基本的経験」を述べた箇所として適当な部分を、三十五字以上四十字以内でこれ以前の本文から抜き出して、最初と最後の二字（句読点を除く）をそれぞれ解答欄に記せ。

問九 (Z) の段落全体を要約する箇所として最も適当な部分を、本文中から十字で抜き出し、解答欄に記せ。

問十 傍線部 7 「衝撃体験」と「経験」とはどう違うのか。これを説明する文として最も適当なものを次のイ、ホから一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 自動車の無差別侵入によって路地での隠れん坊が危険にさらされるような事態と、まだ自動車のなかった時代におとぎ話と隠れん坊を楽しめた経験の違い。

ロ 自動車の販売作戦で稼ぎまくっていることからたらされる天罰と、社会の各分野にもたらされた「成長経済」による喪失の経験の違い。

ハ 隠れん坊で眼かくしを終えた後、突然一人ぼっちの自分が放り出されるように感じる一瞬と、同輩集団ではしやぎ廻る陽気な活動の違い。

ニ 一人の老人によって語られる「親指太郎」のようなおとぎ話の主人公の行動と、言葉の使用を徹底的に取り扱うことによって心身全体で行なう物事との交渉の違い。

ホ 大人になってから初めて受け取って抗体反応を起こすようなショックと、隠れん坊とおとぎ話によってエキスを注ぎ込まれた後に受け取る経験の違い。

次の文章は与謝蕪村の記した『新花つみ』の一話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

常陸の国、下館しもだてといふところに、中村兵左衛門といへる有り。故夜半亭の門人にて俳諧をこのみ、風簞ふうたんとよぶ。ならびなき福者にて、家居つきづきしく、方式町ばかりにかまへ、前栽後園には奇石異木をあつめ、泉をひき、鳥をはなち、飯山の致景、自然のながめをつくせり。国の守も、をりをり入りおはして、又なき長者にて有りけり。妻は阿満あみつといひて、藤井某といへる大賈2の女にて、和歌のみち・いと竹のわざにもうとからず。ころろさま優にやさしき女也けり。さばかりの豪族なりけるに、いつしか家おとろへ、よろづものさびしく、たち入る人もおのづからうとうとしくなりぬ。その家のかくおとろへんとするはじめ、いろいろのもつけ多かりけり。それが中に、いといと身のけだちておそろしきは、一とせの **A**、春待つ料に、もちひいついよりも多くねりて、大いなる桶にいくともなく蔵くらめ置きぬ。そのもちひ夜ごとにへり行きければ、何もののぬすみ去りけるにやと、うたがひつつ、桶ごとに門扇かどのごとき板を覆ひて、そのうへにしたたかなる盤石をのせ置きたり。つとめてのあさ、ころろにくみて打ちひらき見るに、覆ふひはそのまゝにて有りつつ、もちひは半ば過ぎへりうせたり。その頃、あるじの風簞は、公けの事にあづかりて、江府江府にありけり。されば妻の阿満、よろづ **B** 家をもりて、まゐりつかふるものまでもなさけふかく、じひころろ有りければ、人みないとほしとなみだうちこぼすめる。

ある夜、春のまうけにいくしききぬをたち縫ひて有りけるが、夜いたくふけにたれば、家子けこどもはみなゆるしつ、ねぶらせたり。我ひとり一間に引きこもり、くまぐまたがたとぞし、つゆうかがあふべき飯隙いひきもなくして、ともし火あきらかにかかげつつ、心しづかにも縫ひて有りけり。漏刻ろうこく声したたり、ややうしみつならんとおもふをりふし、老さらほひたる狐のゆらゆらと尾を引きて、五つ六つうちつれだちて、ひざのものを過ぎ行く。もとより妻戸・さうじ、かたくいましめあれば、いささかの虚白xだにあらねば、いづくより鑽入くわんにるべき。いとあやしくて、めかれもせずまもりゐたるに、ひろ野などのさゆるものなきところをゆきかふさまにて、やがてかきけつごとく出でさりぬ。阿満はさまでおどろしとおほえず、はじめのごとく物縫うて有りけるとぞ。

あくる日かの家にとぶらひて、「いかにや、あるじの帰り給ふことのおそくて、よろづ心うくおほさめ」など、とひなぐさめけるに、阿満いついよりもかほはせうるはしく、のどやかにものうちかたり、「よべ、かくかくのけいありし」とづく。聞くさへえりさむく、すりよりて、「あなあさまし、さばかりのふしぎ有るを、いかに家子どもをおどろかし給はず、ひとりなどかたふべき。にげなくも剛におはしけるよ」といへば、「いやとよ、つゆおそろしきとも覚えず侍りけり」とかたり聞こゆ。日ごろは窓うつ雨、荻あしふく風のおとだにおそろしと、引きかづきおはすなるに、その夜のみ、さともおほさざりけるとか、いといとふしぎなること也。

(注) 夜半亭…蕪村の俳諧の師匠で既に没していた早野巴人のこと。 飯山…庭の築山。

門扇…門扉、戸板。 江府…江戸。

問一 傍線部1「つきづきし」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 仰々しく ロ 毎月来客があり ハ しつかりとしていて
ニ につかわしく ホ こぢんまりとしており

問二 傍線部2「大賈」の意味するものとして、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 大資産家 ロ 大家の子弟 ハ 大詩人 ニ 大商人 ホ 大名

問三 傍線部3「いと竹のわざ」の意味として、最も適当なものを次のイ～ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

- イ 裁縫の技術 ロ 竹細工を作る技術 ハ 造園の技術
ニ 竹刀を使つての剣術 ホ 笛や三味線の演奏技術

問四 傍線部4「もつけ」とほぼ同じ意味で使われているひらがな二字の言葉を本文中から抜き出して、解答欄に記入せよ。

問五 空欄 A に入るものとして、最も適当な語を次のイ〜ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。
イ 睦月 口 卯月 ハ 文月 ニ 神無月 ホ 師走

問六 空欄 B に入るものとして、最も適当な語を次のイ〜ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。
イ まめやかに 口 すずろに ハ かまびすしく ニ あさましく ホ おどろおどろしく

問七 傍線部 5 「縫ひて」、6 「まもりぬたるに」、7 「出でさりぬ」、8 「とぶらひて」の主語を次のイ〜ホの中から一つ選び、それぞれの符号の記入欄にマークせよ。
イ 風箏 口 蕪村 ハ 阿満 ニ 狐 ホ 家子ども

問八 傍線部 9 「給ふ」、10 「給は」、11 「侍り」は、それぞれ誰から誰への敬意を表す語か。解答を次のイ〜ホの中から一つ選び、それぞれの符号の記入欄にマークせよ。
イ 家子どもから阿満へ 口 阿満から蕪村へ ハ 蕪村から阿満へ
ニ 蕪村から風箏へ ホ 阿満から狐へ

問九 本文の内容と合うものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。
イ 中村家が、繁栄し始めた頃、いろいろとめでたいことが起きた。
口 中村家で、桶の中の餅が夜ごとに減少した事件は、あるじの留守中に起こった。
ハ 中村家で、桶の中の餅が半減する事件は、桶に重石を載せることで起きなくなった。
ニ 中村家で、阿満の膝元を五、六匹の狐が通り過ぎる姿は、使用人たちも目撃した。
ホ 阿満は、狐が現れた時には、不安で仕方がなく泣いていた。

問十 傍線部 X 「虚白」という語を、蕪村はわずかの隙間の意味で使っているが、もとは『莊子』人間世篇の「虚室に白を生ず」（心の中の雑念を払い去ると真実の光が射し込む）を出典とする語である。唐の白居易は、この語を愛用し、「虚白堂」と題する次のような七言絶句を作った。この漢詩を読んで、後の（1）〜（3）の問いに答えよ。

（注）
虚白堂 前 衞 退 後、更 無 一 事 到 中 心。
移 床 就 日 簷 間 臥、臥 詠 閑 詩 側 枕 琴。
（注）虚白堂：杭州在任中の白居易の書斎の名。 中心……心の中。
枕琴……琴枕。琴の形をした枕。

（1）傍線部 12 「衞退後」の意味として、最も適当なものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 建物の影が短くなった後 口 日が没した後 ハ 潮が引いた後
ニ 役所から戻った後 ホ 老衰した後

（2）傍線部 13 「更無一事到中心」を「さらにいちじのちゅうしんにいたるなし」と訓読する場合、解答欄の白文に最も適当な返り点を記入せよ。ただし送り仮名は書かないこと。

（3）傍線部 14 「移床就日」の意味として、最も適当なものを次のイ〜ホの中から一つ選び、その符号の記入欄にマークせよ。

イ 日々莊園を見てまわる
口 毎日すこしずつ床が動く
ハ 寝台の位置を変えることは一日でできる
ニ 長椅子を作ることは一日がかりだ
ホ 日当たりのよい所に寝台を移す